

<教育相談>

不登校の初期段階の子どもへの支援のあり方

～子どものリソースの活用とチーム援助の中核の一員としての保護者との関わりについて～

大垣市立西部中学校 教頭 綿貫 優子

概 要

不登校の初期段階の子ども（不安や混乱が大きくなり、連続して3日から4日欠席するようになり始めた時期）の中には、学校生活の中で自分のできることや興味のあることがあるものの、心理的混乱や身体の不調のため欠席しているケースがある。そういった「自分のできることや興味のあること」をリソースとし、保護者を中核とした援助チームを担当がコーディネートしながらリソースを活用することで、子どもは学校とつながり続けることができるのではないかと考えた。しかし、不登校初期段階は子どもも保護者も混乱していることが多く、「保護者を支える」とことと「保護者と支える」ことを必要に応じて行っていくことが大切だと考え、両面からの保護者との関わり方を工夫した。また、保護者との支援をフィードバックしたり教育通信所見を利用して価値づけたりすることで、不登校の期間を肯定的に捉える視点を示した。その結果、子どもは年間を通して出欠席を繰り返しながらも「登校」というかたちで学校とつながり続けることができた。

1 主題設定の理由

(1) 学校とつながり続けることを目指して

文部科学省「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」（2019）では、「『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある」と述べている。また、「不登校の期間が生徒にとって有意義な時間にもなり得ること」とする一方で、学校の教育活動は子どもの社会的自立を促す機能をもっていることを示している。

そこで、登校するしないに関わらず、子どもが学校とつながり続けられる関わり方を工夫し、検証することが大切だと考えた。

(2) 不登校の初期段階での見立てと支援の方向づくり

上記文部科学省通知（2019）「不登校児童生徒に対する効果的な支援」の中で「予兆への対応を含めた初期段階からの組織的・計画的な支援が必要である」と述べられている。

諸富（2022）は、「連続欠席4日目以降になると、『体の感覚の変調』が『学校に行けないからだ』に変容してくる」ため、「連続欠席3～4日が勝負だ」とし、初期の段階で体の変容の進行を食い止める、何らかのかたちで登校を継続させることの大切さを述べている。

本研究の「不登校の初期」とは「生徒の情緒不安や混乱が大きくなり、連続して3日から4

日欠席するようになり始めた時期」と定義する。

不登校の初期段階について小澤（2021）は「不登校の回復過程の5つの段階」の「不安定期・混乱期」に当たり、子どもは「危機状態、混乱、不安、非日常生活」を経験すると述べている。

一方で、田邊（2021）は「保護者の不登校受容過程」の中で、初期段階の保護者は「戸惑い、他の子との比較、自責、不信」から「怒り」に変化し、家族、子ども、学校や自分自身に怒りが向けられやすいと述べている。

こうした双方の混乱に加え、担任も子どもが休み始めた時期においては自責の念や混乱、怒りを感じることも少なくない。そのような中で「初期対応が大切だ」と言われるものの、混乱している子どもや保護者と今後の方向を決めていくのは難しく、ともすれば対処療法的な手立てをとりながら時間が過ぎていく場合も多い。

一方で、不登校の初期段階では、まだ学校に行くリソース（問題解決のため活用できるもの）が残っていることがある。つまり、「休んでいる」「学校に行けない」ことに目を向けるのではなく、「自分が参加したい（できる）活動がある」「嫌なことばかりではない」「この時間なら学校にいることができる」ということに目を向け、個に応じた支援をしていくことで学校とつながっていけるのではないかと考えた。

田邊（2021）は、「学校へのつながり」に「保護因子」と「リスク因子」があるとし、両面

に配慮することが不登校の未然防止になると述べている。さらに「保護因子」の中には「よい仲間集団」「教員との関わり」「活躍できる場」「帰属意識」「良い習慣」「将来への展望」があり、これらの保護因子が子どもの登校へのリソースとなると考えた。

(3) 援助チームの中核の一員としての保護者との関わり方

上記文部科学省通知（2019）の「学校の基本姿勢」の一つに、「教員だけでなく、様々な専門スタッフと連携協力し、組織的な支援体制を整えることが必要である」とある。

校内の不登校支援組織や外部機関との連携に加え、援助チームの一員である保護者との連携は不可欠である。田村（2009）は、「保護者は、子どもが生まれたときから現在までの『自分の子どもの専門家』であり、もっとも強力な子どもの助っ人である。したがって、保護者も自己決定力を発揮することが望ましい。」と述べている。

しかし、実際は共働きの保護者が多く、学校のケース会や定期的な不登校支援委員会に出席することは難しい。個に応じてケース会や委員会の前に保護者と連絡を取り、子どもの様子や今後の方向について話したり、ケース会で話し合ったことを共有したりするなど、普段から接する機会の多い担任が保護者と学校の援助チームとをつなぎながら生徒を支援していくことが現実的であると考えた。

一方で、田村（2009）は「母親は、子どもを受容したり子育ての軌道修正をしたりすることに精いっぱいであり、自己の内面の方に大きく目を向けている時期がある」「教師やSCが行う子どもへの援助活動を保護者が認識しにくい時期が存在する」と述べている。

これらのことより、不登校初期の段階は「保護者を支援すること」と並行しながら「保護者と共に子どもを支援すること」の両面を工夫し、検証することが必要であると考えた。

2 願う生徒像

初期の不登校の段階において、自分のできることや興味のあることをリソースとして学校とつながり続ける姿

3 研究仮説

【研究内容Ⅰ】初期の不登校生徒において、子どもが学校でできることや興味のあることに注目し、援助チームを機能させながら支援することで子どもは学校とつながり続けることがで

きる。

【研究内容Ⅱ】子どもの支援と並行して保護者を支え、不登校の援助チームの中核としての保護者と共に子どもを支援することで、子どもは学校とつながり続けることができる。

4 研究内容

【研究内容Ⅰ】ケース会と初期面談の工夫

- (1) 本人のできることや興味のあることに注目し、支援の方向を考えるケース会
- (2) ケース会を生かした子どもと担任、保護者と担任の初期面談

【研究内容Ⅱ】援助チームの中核としての保護者との関わり方の工夫

- (1) 「保護者を支える」関わり方の工夫
- (2) 「保護者と支える」関わり方の工夫
- (3) 教育通信を通して「不登校の期間を価値付ける」工夫

5 実践事例

【研究内容Ⅰ】 ケース会と初期面談に関わって

- (1) 本人のできることや興味のあることに注目し、支援の方向を考えるケース会

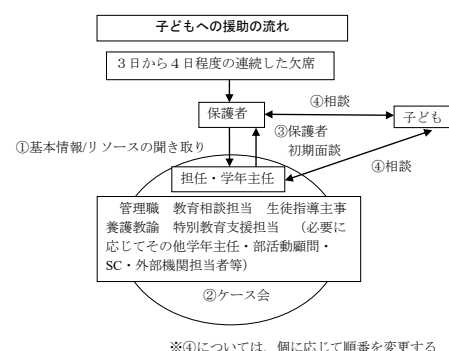


図1 ケース会と初期面談までの手順と保護者の位置付け

図1は、ケース会と初期面談までの手順と保護者の位置づけを表したものである。子どもが連続して3日から4日程度休むようになった段階で、生徒理解・支援シート（文科省/学年別Bシートを元にしたもの）を用いて、基本情報を記入した。さらに、学校生活でできそうなことや興味について本人や保護者、前担任や教科担任、部活動の顧問等から聞き取り、それらを基にケース会で支援の方向を検討した。また、必要に応じて休み時間などの会話の中で、仲の

よい友人から好きなことや興味、生活の様子について聞くこともあった。

ケース会では、支援の方法を検討すると共に、子どもが学校のどの場面でつながっていくのか話し合い、具体的支援や職員の動きを確認した。

次は、ケース会資料と支援の方向の一部を研究の視点に沿って抜粋したものである。

①ケースA（中学2年生）

- ・療育歴あり（母親）
- ・聴覚過敏 体調不良（本人・母）
- ・オンラインゲームで昼夜逆転（前担任・友人）
- ・Q U…学級との関係・進路に落ち込み/教師との関係良好（担任）
- ・興味…美術/行事等のイベント（本人・母・教科担任）

学校でできることや興味を生かした支援

- ・行事の前に声をかけ、別室や体育館ギャラリーからの見学を促す。
- ・担任との関係がよいことから、配布物を学校に取りに来るよう依頼し、つながりを保つ。

②ケースB（中学2年生）

- ・身体の不調 腹痛（母・本人）
- ・家庭環境に大きな変化あり（母）
- ・不登校の原因…本人も保護者も心当たりなし
- ・Q U…進路に若干の落ち込み/教師との関係良好/学級生活満足群（担任）
- ・発達的特性（担任・前担任）
- ・興味…運動部に所属、スポーツ（本人・母・部活顧問・担任・前担任）
- ・将来就きたい職業が明確（母・本人）

学校でできることや興味を生かした支援

- ・自分のペースで部活動に来てもらい話し、顧問と部員に理解を求める。
- ・部活動時に担任から配布物を受け取る。
- ・就きたい職業や、夢のために学校でできることを本人、保護者と考えていく。

（対象生徒と保護者から許可を得ているが、個人情報保護の観点から変更を加えた。（ ）は情報源）

(2) ケース会を生かした子どもと担任、保護者と担任の初期面談

担任と子ども、担任と保護者で不登校のきっかけや今後の支援について話し合った。担任と子どもが話すときは、堅苦しくならないように個に応じてリラックスしやすい場所とタイミングを選んで話した。保護者には来校してもらい担任（学年主任）と懇談した。

基本方針

- ・家庭では休むことを目指す
- ・学校では社会的自立を目指す

不登校の捉え

- ・環境に適応しようとする努力の姿。欠席/登校の行動自体に善し悪しはない

学校としてのスタンス

- ・子どもの気持ちを尊重しながら支援する
- ・登下校を自分で決める。教員は引き止めたり滞在時間を延長させたりしない。
- ・教員が登校の仕方や学校や家での過ごし方等を提案することもあるが、本人の意思と選択を尊重する。
- ・休んでいる間は、なるべく朝起きて夜に寝る生活を勧めていく。

情報提供

- ・欠席が続いた時の成績について
- ・進路先（随時必要に応じて情報提供するが、欠席しても多様な選択肢はある）
- ・外部機関、S C 紹介
- ・登校の仕方の選択肢（相談室、保健室、別室、授業のみ、給食のみ等の部分登校等）

図2 初期面談のフォーマット

最初に、子ども、保護者が共に混乱期であり担任の存在が登校刺激になることより、担任は「登校しないことを肯定的に捉えている」「本人の意思を尊重する」という意思と「実際にそのように行動する」という姿を示した。

さらに、登校の仕方、外部機関情報、成績、進路情報を最初に提供し、本人と保護者が迷った場面で選択できるようにしておくことが、学校とつながり続けることの一つの要因になるのではないかと考えた。また、不安からくる家庭での口論の減少にもつながると考えた。

図2は、初期面談に担任が話題にすることのフォーマットである。このフォーマットを基にして、ケース会で話し合った前述「学校でできることや興味を生かした支援」を加えて話し合いをした。

【研究内容Ⅱ】援助チームの中核の一員としての保護者との関わり方の工夫

(1) 「保護者を支える」関わり方

教員が、不安や混乱の中にいる保護者のよき理解者となり、不登校を共に肯定的に捉えながら子どもを支援していくために次のような声掛けを行った。

- ①電話や家庭訪問をする時に、子どものこととセットで保護者の様子も聞き、ねざらう。

「お母さん、眠れていますか」「お母さんの体調はいかがですか」「お父さんの○さんへの気持ちはどうですか。落ち着きましたか」「休んでくださいね」

- ②保護者の訴えに傾聴と共感で応える。人間関係のトラブルやいじめの訴えがあった時はすぐに動く。

「親ならそんな風に思うのは当然だと思います」「明日は行くとて言われたら、期待してしまいますね。私でもかなりがっかりすると思います」「もう少し詳しく教えてください」

- ③保護者の負の発言が続き、落ち込みの激しさを感じたときに、負の捉えをポジティブに変える声掛けをする。ただし、保護者の気持ちを否定することのないよう配慮する。

「結局行けないとしても、明日行くとて声に出して言うこと自体がすごいですよ」「おっしゃるように、これから大変なことがあるかもしれませんね。○さんはそれも分かっていて、自分なりに一生懸命考えた上で登校できないって言う、その勇気と素直さが○さんらしいですね」

(2)「保護者と支える」関わり方の工夫

図2は、石隈・田村(2003)の「ネットワーク型援助チーム」を基にして本研究における保護者の位置づけを示したものである。

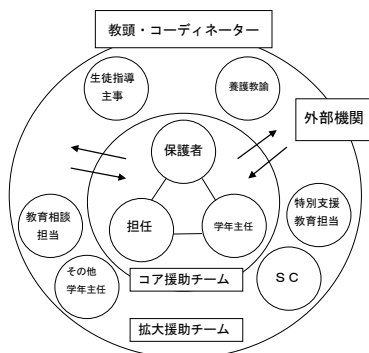


図2 援助チームにおける保護者の位置づけ

このような援助チームの中で、保護者が担任や学年主任と共に中核的な役割を担えるように、ケースAとBについて次の①から④のような保護者との関わり方や声掛けを工夫した。

- ①初期面談で、援助チームの中核として共に子どもを支援していく方向を示す

「保護者が一番よく子どもを知ってみえるので、担任や学校がした方がよいと思われることを教えてください。できないことも遠慮なく伝えてください」「本人と保護者の意見を聞いて学校職員も考えますので、感想や意見をください」「一緒に考えましょう」

- ②保護者からの情報やアドバイスをケース会に生かす、また、ケース会での提案を保護者と話し合ったり、介入を依頼したりする。

担任：（ケース会にて）母親によると、家での子どもの気持ちの落ち込みが強く、部活動が辛いそうです。体は動かしたいので何かスポーツができる場所はないでしょうか。⇒適応指導教室の紹介

担任：（一回目のケース会を受けて）Bさんには将来の夢があるので、学校で何かそれに関わることができたらよいのですが、できそうなことはありますか。

母：（数日後）Bはテストなら教室に入れると言っていました。でも、テストだけ登校するのは周りの目が気になって…。

⇒担任と子どもとで改めて相談し、別室を準備し、学級の生徒と学年職員に理解を求めると支援体制を整えた。

担任から母親へ

お母さんが「試合に出たがっている」と教えてくださったので、顧問が声をかけると、早起きが不安のようです。顧問と「大会に出られる生活をしよう」と話し合いましたので、起床のサポートをお願いします。

- ③保護者の介入やアドバイスをフィードバックする

母：事前に子どもに「○日に部活でお楽しみ会があるよ」と伝えると必ず体調が悪くなるので、お楽しみ会が始まる15分前に子どもに話して、ものすごい勢いで準備をして体調が悪くなる前に連れて来ました。

担任：お母さん、さすがですね。うまくいきましたね。活動場所に行ってみると、友だちと楽しんでいる様子でした。

担任から保護者へ

合唱コンクールの応援では、「家を出てから帰宅までの動きをあらかじめ分かっていた方が安心できる」と教えてください、私たちも準備できたので当日は自分で動けました。

- ④教員としての葛藤を自己開示し、保護者の葛藤と共に共有することでそれぞれの立場を理解しあったり、子どもへの感情を共有したりすることで対等な関係を築く。

母：学校さえ行ってくれたら…学校に行くだけでいいのに。ネットで検索すると、行かなくてもいいみたいなのが書いてあって、そうかなと思うのですが、本当に行かせなくっていいのかなって。そればかりです。

担任：そうですね。私も同じ気持ちになります。担任として学校を休んで充電してほしいという気持ちと、本当に「登校しなさい」と言わなくてよいのかという気持ちがあり、分からなくなることがあります。

担任：どんな気持ちでこの階段を上がって教室に入ってくるのだらうと思ひ、学年職員室をノックしてくれた時に、どんな声を掛けようかと思うことがあります。

母：私も、学校に送り出すときに同じ気持ちです。どんな気持ちで歩いていくのだらうって。（涙を流す）

- (3) 教育通信を通して「不登校の期間を価値付ける」工夫

不登校の期間を肯定的に捉えて評価することは、子どもを支えることはもちろん「保護者を支える」ことにつながると考えた。さらに「保護者と支援してきたことが価値あることであった」というメッセージを保護者に送ることにもつながると考えた。

そこで、以下のように「社会的自立に関わること」「自分自身を見つめる有意義な時間を過ごしたこと」について具体的な行動を取り上げ、価値づけた。

…定期的に登校したり、来年度の職場体験学習の事業所を選んだりするなど、緩やかに学校とつながり続けられたことの中には、大きな努力があったのだと思います。感受性が豊かで自分のやり方で自己表現できる、そんな〇〇さんです。これまで通り、自分のペースで自分なりに歩むことを大切にしてください…

…将来〇〇になりたいという夢を大切にし、全てのテストに参加できたことも素晴らしいです…

…適応指導教室の体験にも参加し、自分の活動の場を増やそうと努力することができました。

自分自身のあり方や、学校生活のあり方について深く考えることができました。登校できる日には別室で学習したり、行事を見学したりするなど、自分で考えて実行するその行動力が素晴らしいです。特に音楽鑑賞会では、〇〇高校の演奏を通して高校進学への憧れをもつことができました。また〇学期の後半には仲の良い友達との交流もできるようになり、少しずつ人との関わりも増えました…

（対象生徒保護者には許可を得ているが、個人情報保護の観点より修正を加えた。）

6 成果（○）と課題（●）

【研究内容Ⅰ】ケース会と初期面談の工夫

○ケースAでは、行事が好きだということを受け、保護者とタイミングを調整して声をかけた。登校から下校までの見通しを持てること、同級生の目にふれたくないという本人の訴えを聞いた保護者のアドバイスを基に学校の受け入れの準備を整えることで、以下のように登校できた。また、担任との関係が良好だったことから、「担任が忙しいので家庭訪問できないから学校に配布物を取りに来て」と依頼した。

Aが見学した行事

- | | |
|-----|------------------|
| 9月 | スポーツフェスティバル |
| 10月 | 音楽鑑賞会/合唱コンクール |
| 11月 | 学習文化発表会 |
| 12月 | 性に関する講話/ロードレース大会 |
| 1月 | 県合唱コンクール出場の学級の応援 |
| 2月 | 人権講話 |
| 3月 | 球技大会 |

○ケースBでは、顧問や部員の理解と受け入れを依頼した。Bは部活の時間が長い日や、週末に参加することができた。特に親しい友だちが声をかけると参加しやすいという母親の情報から、部活動を休みがちになるタイミングで友だちから声をかけてもらった。その結果、月に3日から7日程度登校し続けた。

○初期面談の最初に、本人の意思を尊重すること、不登校を肯定的に捉える姿勢を示すことで、子どもが担任と会う不安を軽減できたのではないかと考える。また、子どもは「自分の気持ちを伝えてもよいのだ」と捉え、「合唱コンクールは見に行きたい」「今度の大会に出たい」と担任に伝えることができるようになった。また、保護者も学校から登校を促される心配なく初期段階を過ごせたのではないかと考える。

○●ケースBでは、「就きたい職業や夢のために学校でできることを探す」というケース会の提案を保護者に投げかけたところ、「テストなら行ける」と本人が言っていることが分かった。

そこで、担任が本人と話した後、職員や学級の生徒の支援を整えて受け入れたところ、別室受験から徐々に教室受験ができるようになっていった。職員の思わぬところでつながることのできたケースであった。

しかし、表情が硬く、本人への負担が大きいように感じられる時期もあった。周到的支援や保護者と担任の結びつきから子どもが気持ちを伝えられなかったのではないかと推測された。担任以外が客観的に様子を見る体制も必要であり、子ども、担任、保護者の結びつきのバランスをとりながら取り組む必要を感じた。

●成績や進路、外部機関の情報等をあらかじめ提供したが、改めて保護者が「落第はありますか」と質問したり「行ける高校がない」と悲観したりする姿が見られた。また「ネットで調べてきたのですが」と初期面談で紹介した市の相談機関について尋ねられたりすることがあった。不登校の初期段階では、先を考えたり受け入れたりが難しく、情報過多になったのかもしれない。改めて必要なタイミングで必要な情報を提供することの大切さを感じた。

【研究内容Ⅱ】援助チームの中核としての保護者との関わり方の工夫

○子どものことを尋ねると同時に保護者にも声をかけることで、子どもと保護者との関係を押し量ることができたり、保護者自身の気持ちを引き出し、深く寄り添いやすくなったりした。特に、子どもができることに目を向けた、ポジティブな捉えの投げかけには「そんな風に考えることは思いつきませんでした」「そう言われればそうですね。できていることもあるのですね。帰ったら褒めてあげます」といった反応が多くみられた。また「認めてもらえて嬉しいです」と涙を流される姿も何度か見られた。

○家庭訪問や電話連絡の時などに保護者の介入や、保護者のアドバイスからの支援のフィードバックを繰り返すことで、保護者も担任も子どもとの関わり方を工夫するようになった。

○保護者と担任との葛藤や感情の共有は、不登校初期の混乱期においては、対等な関係を感じる場面であり、かつ担任と保護者の双方の気持ちの支えになることがあった。また、保護者と担任が同じ葛藤を持ちながら子どもと向き合っていることを確認する作業でもあった。

○「教育通信の所見を読んで、涙が出ました」と保護者からの言葉をもらうことが何度かあった。具体的な行動を挙げて「社会的自立につながる」有意義な時間であったと肯定的に記述することで、ともすれば登校がゴールだと考えがちな初期段階の期間において、学期を通して支援してきたこととその成果を認め、次のエネルギーを生み出す力になっていくことを感じた。

●学校や担任の意見と、保護者の意見がうまくかみ合わないこともあった。互いに試行錯誤し、意見を言い合っていることに目を向け、十分に話をすることが大切だと感じた。

7 終わりに

不登校の初期段階の子どものリソースを活用しながら、保護者を支援し、保護者と共に子どもを支援するということに焦点を当てて検証した。本研究の「学校とつながる」ことは、「部活」「テスト」「行事」が「登校」というかたちでつながったが、リソースは個によって違うため、もっと違うつながり方もあると考える。「不登校は初期対応が肝心」と言われるが、実際具体的に何を、どのように対応すれば効果的かと考えてきたことを検証できたと考える。

参考文献

- ・石隈利紀・田村節子 (2003) チーム援助入門 学校心理学・実践編 図書文化
- ・石隈利紀監修 水野治久編(2009) 学校での効果的な援助を目指して ナカニシヤ出版 田村節子「保護者をパートナーとした援助チームの実践」pp151- 160
- ・文部科学省(2019)「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」
- ・小澤美代子監修 田邊昭雄編著(2021)不登校への標準対応 ほんの森出版
- ・諸富祥彦(2022)学校に行けない「からだ」図書文化